

Die (友情) Freundschaft

事務局：
〒010-1632 秋田市新屋大川町 12-3
秋田公立美術大学 野村研究室内
<http://www.jdg-akita.org>
(018)888-8110
nomura@akibi.ac.jp

これからの日独交流

会長 添野 武彦

会員の皆様、新年明けましてお目出度うございます。中東やヨーロッパでは世情不安定となっている中での新年を迎えました。今年は状況が好転するのを、ひたすら願うばかりであります。さて、私共が関心を寄せ、パッサウを窓口にも友好の絆を深めて来たドイツはどうでしょうか。中東からの難民が多数押し寄せていることは、ニュースなどで承知していますが、今のところ平静が保たれているようがあります。状況は流動的ですので、暫くは経過観察を続けるしかないようです。

昨年10月、私共は秋田公立美術大学の学生さん14名を交えて、一昨年のパッサウからの秋田・パッサウ姉妹都市提携30周年を記念しての訪問への答礼の形で、パッサウを訪れました。秋田日独協会会員22名(現地合流の2名を含む)共、総勢36名の大人数での旅行となりました。このように、今回の訪問では、学生さん達という限定された集団ではありましたが、老若混合の訪問であったのが特徴です。両市の友好関係が30年を超え、今迄と変わらぬ会員の情熱と、秋田市の支えによって続いてきたことは意義深いものであり、個人的な繋がりが深まった方々の何人かいらっしやったのは、大変貴重なものであり、これからも大切にしなければならぬ事は、論を俟ちません。

しかし、交流の歴史が長くなると、ともすると惰性に流れ、慣行的な交流事業をこなすことになりがちなのは厳に戒めなければなりません。姉妹都市提携を結んだ時とは、環境・状況が変化してきたことを重い現実と受け止めなければならぬのです。両市の友好関係は、そもそも両市の間で公式に認め合ったうえに成り立っているのですが、この30年の間に秋田市当局では国際交流課が廃止され、企画調整課内の国際交流担当に規模が縮小変更されました。即ち、ドイツとの交流を含めた国際交流は市民が前

面に出る形となり、行政はそれらの活動の後押しをするということで、一歩引いた姿勢となったのです。行政の機構変化に拘らず、今迄もパッサウとの交流を担ってきたのは、全くのボランティア団体である私達・秋田日独協会が中心となったことでした。今迄以上に私達の活動は積極的になる必要があります。さもないと、予算的なことから折角、故高田景二市長さんが土台を築いて下さったこの友好関係が、歴史の一ページに変わって行く恐れがあります。



これからの国際交流のエネルギーを担うのは何でしょうか？まずは現在登録されている会員の方々の、総会をはじめ様々な行事に多くの方々の参加が得られ易いように考えなければなりません。会合や行事のたびに、いつも同じような言わば固定されたメンバーの日独協会ではならないと考えます。その二として、メンバーの若返りを図る必要があります。その意味で今回の学生さん方の旅行参加は、新しい段階を迎えるヒントになった意義深いものと思います。このうちの何人かが協会の活動に興味を示し参加して下さいれば申し分無しです。その三は、交流活動の幅を拡げることです。まずは今年夏に計画されている、スポーツ少年団の交流を成功させようではありませんか。その時忘れてほしくないのは、勝敗ではないのです。同年代の世代間の相互理解です。言葉の壁を超え、異文化圏の友人を理解することです。スポーツはそのための切掛けです。同様に、音楽や更に踏み込んだ芸術交流、ゆくゆくは医療交流など、交流窓口を多数設けることが必要と考えます。そのためには是非とも若い方が参加しやすい組織に変わって行くことが必須と考えます。皆様のご協力をお願いし

たいところですよ。

さて、昨年10月のパッサウ訪問では、移動に時間が費やされ多少忙しい旅行ではありました。しかし、海外旅行を経験し、異国の方々と交流し、歴史的な作品・遺産に触れることは、海外初体験の学生さんは言うまでもなく、何回か経験している会員にとっても、改めて自国の文化や状況を見直す良い機会であると考えます。若者の海外留学希望者が少ないと報じられている現在、私達の草の根的活動は、ますます重要性を増すものと考えます。

何か、理屈っぽい事を長々と書きましたが、要するに、これからも若者を誘って日独協会の活動を元気にやってゆきたいとの希望を述べました。今年が皆様にとって良い年



(撮影：添野会長)

であります事を祈念し、念頭のご挨拶とします。今年も宜敷くお願いいたします。

《旅行に参加された方よりご寄稿いただきました》

「ドイツパッサウ市訪問・イタリアの旅を終えて」

理事 川村 誠

楽しみにしていた久々の訪独が実現。10月13日秋田空港 9:45 羽田空港へ向けフライト。羽田で LH715 (ルフトハンザ) へ乗り換え 12:20 いよいよ最初の到着地ミュンヘンへ。12時間5分間の空路――。

この度の訪独が実現に至るまでの経過を思い出し、考え深いものがありました。私たち有志8名でなる独語教室(現在は休講中)が、渋谷義博氏を講師に月2回受講しておりました。5年前にその教室で秋田市・パッサウ市姉妹都市30周年を迎えるにあたりパッサウ訪問をしたいという話が出ました。実現する為に旅費の一部にと積み立てを始めました。

その一方、パッサウ訪問について秋田市当局並びに秋田日独協会の理解を得ることが出来るよう渋谷氏が、関係各位に働き掛け、ご尽力をされました。しかし、パッサウ市がドナウ川、イン川の大洪水で市内が多大な被害を受けることになり、訪独の計画が一時棚上げとなりました。

昨年(平成26年)E.トレーガー副市長、S.ラウシャー独日協会会長、市議会議員、パッサウ市民の一行が秋田市・パッサウ市姉妹都市30周年記念式典に来

秋された。再びパッサウ訪問の機運が高まりました。

いよいよ野村先生を中心として訪独計画が動き出しました。しかし団体割引人数30名がなかなか集まらない。日独協会の会員がそれぞれ友人・知人に呼び掛けても若干不足、しかし素晴らしい救世主が現れました。秋田公立美術大学生14名が加わり、秋田出発時には34名、それにミュンヘンで柳原せい子さん、パッサウで佐藤妙子さんが合流し、石井副市長ご夫妻に秋田市役所当局のメンバーを含めて42名の大訪問団がパッサウを訪問する事になりました。今回の訪問は野村先生の絶大なるご尽力の賜と心から感謝しております。

10月13日 17:25(時差7時間サマータイム)ミュンヘン到着。入国手続きを済ませ一路ホテルへ。ラッシュアワーと交通事故で2時間遅れてホテル到着。夕食終了後9時半過ぎ、飲料水を求めるためにミュンヘン駅に。売店は22時クローズ、ぎりぎりセーフやっと水が飲める。

10月14日午前中、ミュンヘン市内観光(ニンフェンベルク城等)、昼食後、専用バスでパッサウへ、午後4時40分、見慣れたパッサウ市の風景が目に入って来た。パッサウに向かう途中、私に、渋谷氏の娘さ

ん千里さん（パッサウ在住）から電話が入り、市内観光をしないで 25 年来の友人カール・ズィネック宅に来よう呼びが掛かり、メンバーが市内観光をしている間、加賀谷ユウ子さん、伊藤さんご夫妻と一緒にカール宅に伺い、パッサウ市主催の晩餐会が始まる前のひとときの再会を楽しみました。特に今回は娘マリアさん（当時小学生）が、1 歳の子の母親となった姿を見て嬉しい思いでした。（カール・ズィネックファミリーとは、25 年前に高清水小学校とインシュタット小学校の姉妹校調印式に息子と一緒に訪問したときのホームステイ先であり、25 年間家族付き合いをしており、お互いの家族が家庭訪問しています）

15 日は、ドゥッパー市長表敬訪問、石井副市長のスピーチと調印式、そこでは千里さんの素晴らしい通訳、Rathaus（市庁舎）を出てから、何度かパッサウ訪問経験者、初めての訪問者、大学生の 3 班に分かれての市内観光、その後シュテファン大聖堂で集合し、パイプオルガン演奏会を聴く。昼食後、パッサウ三河川クルージング、市内の壁のいたる所に大洪水の爪痕を見ると被害の大きさに驚きました。クルージングの後、フリータイムを利用して再びカール宅を訪問、加賀屋誠治さん、加賀谷ユウ子さん、庄司規子さんと同行、楽しいひとときを過ごした。ホテルまでの帰りにオーストリア国境までドライブし、高台から望むパッサウ市の風景が心に深く刻み込まれました。

パッサウ独日協会主催晩餐会では、30 周年式典で来秋された方々が沢山参加され、再会を喜び合いました。

このたびのパッサウ訪問には、ラウシャー会長さんをはじめパッサウ市民、チェリニー・ヨリコさん、井上さん、千里さんには大変ご尽力いただき心から感謝しております。独日協会の方々には、今回の訪独メンバーに多くの大学生が入っていることに大変興味を持たれたようでした。今後の独日協会の発展と文化交流を考えた場合、秋田公立美術大学のもたらす意味、意義を改めて考える機会を与えてくれたようです、とっておりました。学生の皆さんは、秋田公立美術大学の認知度を大いに高めてくれました。

時が過ぎるのを忘れさせるほど晩餐会は盛り上がり、ひとり一人の心の中に素晴らしい思い出を刻みながら別れの時が来た。

Auf wiedersehen = さようなら

10 月 16 日 AM7 時パッサウからミュンヘン空港へいよいよイタリアへ。ベネチア・フィレンツェ・ローマとイタリアの三日間の旅は、歴史と美術・美味しい食事、ショッピングまさにカンツォーネの世界を満喫しローマ空港からフランクフルト空港経由で羽田空港へ。

10 月 20 日秋田空港 18:45 到着。添野会長を団長としたドイツパッサウ・イタリア訪問の旅は、何事もなく無事終了することができました。

JTB 押切添乗員さんに感謝！！



オーストリア国境からパッサウ市を眺める
Makoto、Herr Karl Synek（カール・ズィネック）



Familie Synek（ファミリー ズィネック）
Sissy スィスィー（奥さん）、Maria マリア（娘）、
Antonia（孫）、Makoto（誠）

理事 加賀谷 ユウ子

外国を旅する目的は人によってそれぞれであろうが、私の目的はただひとつ、友に会うためである。1988年から始まった私のドイツ・パッサウ訪問は、今回で6回目になった。

最初は団体旅行ではあったが、初めての海外、それも小学生の子どもを連れてのホームステイであり、何もかも珍しく、心細くもありの旅であった。よく頑張ったものだと思える。しかし、これが私にとっていろいろな意味で世界を広げてくれた大きな機会であったと思う。

今回会った友人は、ノイシュティフト小学校との姉妹校提携時代からのもう28年間のお付き合い。訪問のたび毎に必ずと言って良いほど会っているフランチェスカ・シュレッターさん。お歳は80才を過ぎているかどうか。今年の3月にご主人を亡くしたばかりである。パッサウのホテルの前で私たちのバスが着くのを待っていてくれた。顔を見た瞬間、お悔やみの言葉もみつからず、6年ぶりの再会と相まってただ涙ながらに抱きしめ合った。彼女と一緒に、昔からの知り合いのクレPPERさんも迎えに出てくれた。久しぶりだったので忘れないでいてくれたことに感激した。

フランチェスカさんは、次の日も一日行動を私たちと共にしてくれ、セントシュテファンドームでのミサに参加。荘厳なパイプオルガンを聞きながら、心から亡くなったご主人のハンスさんの冥福を祈った。ドナウ河のクルージングも楽しんだ。同じテーブルでコーヒーを飲みながら、来し方の思い出やお互いの家族のことなど、拙い英語ではあったが、心は通じ合い、短くも大切な時間を過ごした。

別れの時、再会を約束したが、ドナウ河から街へ向かう長い石段を、後を振りむかずに帰っていく彼女に「必ず、必ず、また会おうね。」と本当に叫びそうになった。80才を超えた彼女。今回やっとの思いで出かけた私。また会えるだろうかとの思いが心をよこぎり、涙をこらえながら見送った。

もう一組の友人・ズィネック夫妻も愛情を込めて私たちを迎えてくれた。スポーツ交流で彼らが家族で秋田を訪れた時、夫人のスイスイさんが我が家にホームステイして以来の交流である。彼女には本当にたくさんの思いやりやおもてなしを受けた。パッサウを訪れる度に手作りのケーキや料理で歓迎してくれる。楽しくてチャーミングなご主人のカールさんと穏やかで優しいシィシィさん。イン河を渡って少し登った丘の上に建つ素敵な住まいはいつも暖かく迎え入れてくれる。3・11の東日本大震災の時、すぐに国際電話をくれ「すぐに私の家に逃げて来て！」と言われ、「秋田は大丈夫」とやっとなら答えた思い出もある。ここまで考えてくれる友を持つ私は本当に幸せだと思っている。秋田に帰り、訪独の余韻に浸りながらも、忙しさにとりまぎれ、お礼の手紙もメールも出せないでいる。クリスマスカードに感謝の気持ちをたくさん込めて早めに送りたいと思っている。



フランチェスカ・シュレッターさん宅にて



ズィネックさん宅にて

秋田公立美術大学1年 今村 安里

今回、パッサウ訪問を含めたドイツ・イタリア渡航に、秋田公立美術大学の学生も同行できることになり、参加させていただいた。私は今回で3回目の海外渡航だったが、ドイツもイタリアも初めてだったので、次は何が私を待っているのだろうと楽しみで仕方なかった。

飛行機に乗り、いざドイツ(ミュンヘン)に着いてみると、地元の牧場の匂いがしたのが忘れられない。今思っても不思議だが、私はそう感じた。その日は夕食後、宿泊ホテルの近くにあるミュンヘン駅でちょっと買い物をして一日が終わった。

2日目にパッサウに移動した。今回訪問した場所ではパッサウの街並みが一番好きだと思った。パッサウを一望できるオーバーハウスの展望台の上から見下ろすと、イン川とドナウ川に挟まれた地にたくさんのパステルカラーの建物が見えた。翌日、石畳の道や建物の中の細い路地など、日本のそれとは違う、優しく美しい色彩が溢れる街にすっかり魅入りながら、街歩きを楽しんだ。その頃の秋田よりも寒かったが、パッサウに吹く風を自分の体で感じられることが嬉しくて、クルージングの間もずっとデッキに出て、カメラを構えていた。

交流会では、拙い英語ながらも、なんとかコミュニケーションを取りながら…という感じだった。名刺に即興で絵を描いたり、日本文化紹介としてみんなで折り紙を教えたりと、楽しい時間だった。なによりも、私たちにとても優しくしてくださり、喜んでくれることが嬉しかった。連絡先の交換もして、これからも交流が続いていけるようになり、つい最近まで何も知らなかったはずのパッサウの街だが、縁が結ばれた素敵な交流会となった。

他にも、パッサウで人生初のビールを飲んでみた。日本では今はまだ飲めないなので、日本のビールの味と比べられないことが残念…。食事は、本場のソーセージから、付け合わせにはジャガイモ、芋、いも…。食

文化も日本と違い、しょっぱかったり濃かったりしたが美味しかった。

イタリアでは、ベネチアに始まり、フィレンツェ、ローマを訪問した。

ベネチア本島では運河を水上タクシーに乗り、風や波に揺られて移動し、サン・マルコ広場に到着。晴れた青空と太陽が眩しくて、ドイツとは打って変わった気候がまた気持ち良かった。天気の良いときにまたドイツを訪問したいと思った。自由行動をしているとだんだんと日が落ちていって、夜の暗いベネチアも素敵だった。水面に灯りだけが映り込んで、昼間の賑わいと違うベネチアの美しい静けさを感じて、ここで朝を迎えてみたいと思った。



パッサウ独日協会主催の歓迎会にて



パッサウ独日協会主催の歓迎会にて



ベネチア本島へ向かう水上タクシーにて

ローマでは半日市内観光オプションツアーに参加し、トレビの泉やスペイン広場、コロッセオにフォロ・ロマーノといった観光地を巡った。移動中にも突然、遺跡があったりしてさすがローマだなと驚いた。総合英語の授業で、オードリー・ヘプバーン主演の映画『ローマの休日』を教材として使用しており、その撮影現場でもある真実の口も見に行くことができた。

自由行動のときにも、映画の冒頭で出てくるお屋敷を偶然見つけた。映画での白黒の場面に一気に色が焼き付いた。また、古代史が好きな私にとってコロッセオやフォロ・ロマーノは最も行きたい場所の一つであ

り、入ったときのあの大きな迫力は忘れられない。と同時に、ここは奴隷や猛獣たちの闘技場であったということ考えると複雑な思いが込み上げた。しかしそれを考えさせてくれるものが現代に遺跡として残っていることは、大変偉大であり、そこに立てたことに感動した。その後、本場のピザを食べたり、画家・ラファエロの墓があるパンテオンや教会を見学した。

この渡航ではウフィッツイ美術館やニンフェンブルク城で、著名な多くの美術作品を観ることができた。ダヴィンチやボッティチェリなど、教科書でしか見られなかった作品を生で観ることができて、貴重な体験だった。

正直、日に日にこの渡航が夢のように思えてくる。しかし、写真を見返すと思い出される感覚や思いがある。私は高校生の頃から、将来は海外で仕事がしたいと考えていて、いろいろなことに興味を持ち、視野を広げるために何でも積極的に行動しようと決意していた。今回の渡航での、この自分の中にしか残らない経験をこれからにつなげていきたい。

渡航に誘ってくださった、野村先生をはじめ、温かく迎えてくださった秋田日独協会の皆様、ありがとうございました。

■■ 旅行スケジュール（概要）〈2015年10月13日（火）～20日（火）〉 ■■

- 10/13（火） 秋田空港～羽田空港～ミュンヘン空港着。ミュンヘン泊。
- 10/14（水） 午前：ミュンヘン市内観光 / 午後：パッサウ市へ移動
- 16：00 パッサウ市到着 パッサウ独日協会よりカフェご招待
- 17：15 オーバーハウス城見学
- 19：00 パッサウ市主催歓迎晩餐会（於 Bayerischen Loewen）
- 10/15（木）
- 9：00 ユルゲン・ドゥッパー市長表敬訪問（於 パッサウ市正庁）
- 10：00 市内見学<1班：パッサウ国立図書館長 Dr. ヴェナーホルドの案内により同館のルネッサンス/バロック時代基調資料庫見学。2&3班：市内探訪>
- 12：00 シュテファン大聖堂にてパイプオルガン演奏会
- 12：45 旧市内で昼食（パッサウ独日協会により“Rest. Am Dom”ご招待）
- 14：00 パッサウ三河川クルージング
- 15：00 ガラス博物館（Hotel Wilder Mann内）見学
- 19：00 パッサウ独日協会主催歓迎晩餐会（Hacklberg ビール醸造所大ホール）
- 10/16（金） 午前：パッサウ出発、ミュンヘン空港経由でベネチアへ移動
- 午後：ベネチア本島観光
- 10/17（土） 半日フィレンツェ市内観光 / 夕方：ローマ着
- 10/18（日） ローマ市内観光（自由行動・オプションツアー）
- 10/19（月） ローマ空港～フランクフルト空港～羽田空港へ
- 10/20（火） 東京（羽田空港）～ 秋田空港到着

オーバーハウス城の展望台にて (10月14日)



追悼報告

1983年、ドイツ連邦共和国と日本との友好親善をはかることを目的に、パッサウ市において「パッサウ独日友好会」を設立され、1984年の「秋田市—パッサウ市姉妹都市提携」に際しては、当時の高田景次秋田市長と絶大な信頼関係を構築の上その実現に向けてご尽力、今日まで両姉妹都市関係の発展を模索し続けてこられたマルティン・テッシュェンドルフ氏（Herr Martin Teschendorff）が、昨年11月、90年の生涯を終えられました。

秋田日独協会は、年明け早々、添野武彦会長名でハンナ・テッシュェンドルフ令夫人に、故人の大いなる功績を称えとともに、哀惜の念をお届けしましたことを報告します。

2016年1月 副会長 渋谷 義博

Nachruf

Die Stadt Passau betrauert den Tod von

Herrn Martin Teschendorff

Inhaber der Ehrennadel der Stadt Passau

Der Verstorbene hat sich als langjähriger Geschäftsführer und Vorstand der Deutsch-Japanischen Gesellschaft in Passau e.V. um die im Jahre 1984 gegründete Städtepartnerschaft zwischen Passau und Akita besonders verdient gemacht. Als Gründer des Deutsch-Japanischen Freundeskreises hat er den Weg für die Städtepartnerschaft geebnet. Er hat sich während seiner langjährigen ehrenamtlichen Tätigkeit stets mit hohem persönlichem Engagement für den weiteren Ausbau und die Vertiefung dieser Städtepartnerschaft eingesetzt und damit zur Völkerverständigung beigetragen.

Die Stadt Passau würdigte seine hervorragenden ehrenamtlichen Verdienste im Jahr 2005 mit der Verleihung der Ehrennadel.

Wir werden dem Verstorbenen ein ehrendes Gedenken bewahren.

STADT PASSAU

Jürgen Dupper, Oberbürgermeister

追悼の言葉

パッサウ市は、パッサウ市栄誉章受章者である
マルティン・テッシュェンドルフ氏のご逝去を悼みます。

故人は、長年にわたりパッサウ独日協会事務局長および理事として、1984年に締結された「パッサウ市—秋田市姉妹都市交流」のためにご尽力されました。

“独日友好会”の創立者として、両市の姉妹都市提携に向けて奔走され、後年、名誉役員の立場に着かれてからも、高邁な精神で積極果敢に姉妹都市交流の発展に尽くされ、以って民族の相互理解に貢献されました。

パッサウ市は2005年、氏の多大なるご功績を称え、パッサウ市栄誉章を授与しました。

私たちは故人に対し長く尊崇の念を表してまいります。

パッサウ市長

ユルゲン・ドゥッパー

(2015年12月9日付パッサウ新報追悼欄より)



ドイツ語で格言・諺 : Weite Reise macht weise. 広く旅をすると賢くなる

《編集後記》

今回はパッサウ市訪問の特集号として市民交流の様子をたっぷりお届けしました。パッサウの家族と出会ってから20数年経った今でも交流が続いているという会員がいることのすばらしさに感動をおぼえると共に、今回は学生の皆さんがたくさん参加してくれたことで交流の幅が広がっていることを実感でき、心から嬉しく思っています。

会員の皆さんからの寄稿やメッセージ、そして、ドイツに関する話題などを広く募集します。送り先は、表紙の事務局の住所へ、または、メールにてお送りください。

秋田日独協会ホームページ <http://www.jdg-akita.org>

法人会員

(株)秋田魁新報社様・(株)JTБ 東北秋田支店様・日本エア—サービス秋田営業所様・(株)日本旅行東北秋田支店様